編集後記：この４月から変わるもので真っ先に思い浮かぶのは，言わずもがな消費増税をはじめとした各種の税制改正ですが，「天気」編集委員会の顔触れも若干ながら変わることをお伝えしておかねばなりません．かく言う私も，編集委員を拝命してわずか２年にして，気象庁から他省庁へ出向するためにお暇をいただくことになりました．このタイミングで編集後記の順番が回ってこようとは思ってもみませんでしたが，せっかくの機会ですので，自身が担当していた校正（の苦悩？）について振り返ってみたいと思います．

各記事の校正は，編集書記が主担当となり行いますが，気象庁ビル内の編集委員も加わり，ダブルチェックを行っています（我々には，より校閲に近いレベルの校正を求められているのだと思っています）．５名程度の担当がいますので，１年に２～３回当番が回ってきます．例えばこの４月号の記事であれば，３月の中旬頃から４月の中旬ぐらいまでがその作業期間です．夕方になると編集書記から著者校正の終わった原稿が届くのですが，平日はかばんの中で自宅との往復を繰り返すばかりで，土日にいよいよ溜まった原稿の山を泣きそうになりながらこなすといったこともままありました．

そうこうするうちに慣れてくると，例えば“：”と“:”のように全角と半角の違いなどは容易に判別できるようになりますが，なかなか悩ましいのは査読未満校正以上とも言える日本語表現に関するもの．どうしても気になってしまい，著者に修正をお願いしたことも何度かありました．いずれもご快諾いただいたのですが，どこまでが校正の領分か塩梅が難しいところです．

２～３回の改稿後にこれまで見逃していた誤字等に気づき，嬉しいやら悔しいやらの思いをするときもあります．あるとき，校正業務を行ったことのある知人からコツを伺いました．逆から読むと，文字ではなく記号として頭に入ってくるので良いとのこと．なるほどと思い試してみましたが，どうしても文章を読みたくなってしまい，上手い具合にいきませんでした．その域に達するには，まだまだ経験不足なのかもしれません．

さて，出向先は内閣府の防災担当と聞いており，異なる立場から気象業務とお付き合いすることになりそうです．校正と同じく，一度視点を変えてみると新たな発見があるのではなかろうかと自分に言い聞かせ，激務であろう４月以降の生活への不安を紛らわせています．

（梶原佑介）